

東アジアにおける観光とグローバリゼーション — 台湾の日式温泉の事例から —

東 美晴

1. 序論

(1) ホスト-ゲスト関係, あるいは日台関係の変容

昨今, 台湾の観光においては温泉が見直されている。その中に「日式」と銘打った温泉も少なくない。台湾における温泉の多くは日本統治時代に開発されたものである。だが, これらの温泉は1960年代, 70年代には日本からのセックスツアーの受け入れ先となってきた。この意味で旧来の「日式」温泉は, 台湾にとってむしろ屈辱的なイメージを伴うものであっただろう。しかし, 1990年代に入り, 日本のメディアの解禁とともに日本イメージは変化していく。90年代後半には哈日族など, 日本の消費文化をそのまま受け入れる若者さえ現れる。このような変化の中で, 観光における日台関係も変化を被ることになる。観光客は日本から台湾へ流れるばかりでなく, 台湾から日本へも多く訪れるようになった。台湾において「日式」の文字を冠した温泉は, こういった背景のもとに人気を呼ぶようになったものである。

本稿の目的の第一は, 台湾における上記のような温泉観光の変遷を通し, 国際観光におけるパラダイムの変化を示していくことにある。ここにおいて, 特に筆者が注目するのは, ホスト社会-ゲスト社会間の変化である¹⁾。ホスト社会(観光客を受け入れる側の社会)-ゲスト社会(観光に訪れる側の社会)間の固定性および非対称性は, 国際観光, 特に民族観光の分野では前提となってきた。これは, 観光産業の導入が, 経済的に立ち後れた地域において効果的であると認識されていることに起因する。実際, 観光人類学では, この前提のもとに, 観光がホスト社会に対してもたらすインパクトに関する研究が積み重ねられてきた²⁾。

冒頭の文脈から読みとれる通り, 観光における日本との関係において, 台湾も長い間ホスト社会であり続けてきた。だが, 今日の「日式」温泉の流行は, 台湾-日本間の長

期に渡り固定化してきた関係の変容に根ざしたものである。本稿の第2章においては特にこのホスト-ゲスト関係の変化に注目し、台北の北投温泉の事例を中心に、変貌する温泉観光地のあり方を示す。

(2) 消費文化としての観光文化

台湾における「日式」温泉の流行の背景には、移動の時代とでもいうべき、日台間における人、モノ、情報の相互的な越境に支えられている。このような現代の観光現象に対するアプローチとして、本稿では観光文化の消費文化としての側面に注目し、台湾の温泉観光地に見いだされた新たな文化的価値を探る。これは、本稿の第3章で、台湾の温泉において「日式」に付与された価値の解釈を試みることを通し示していく。なお、本節では、その前提として、消費文化としての観光文化の特質に触れておく。

観光文化は多かれ少なかれ消費文化としての側面を持っている。既存の歴史的建造物や生活様式に文化的価値を見だし、それを見る、体験する等の形で消費の対象としていくことは観光開発のひとつ手法である。そのため、民族観光においては、伝統芸能の観光客向けの再編や、伝統的イメージを喚起させる祭りの創出など、文化の改変や再構築がしばしば行われてきた。補足として、こういった観光によってもたらされる文化変容は、むしろ文化創造の名の下にポジティブな変化として捉えられるケースが多く報告されていることを指摘しておく³⁾。

上述のような意味において、もともと観光文化とはその本物性が幻想に取り囲まれたものである。それでも、観光客にとっての観光地の価値とは、その場所へ行かなければ見ることができない、体験できないという本物性の追求にある。だが、観光体験の本物性は、すぐに次の逆説に辿り着く。ディズニーランドのようなテーマパークでの体験である。ここでは、その体験の質に関する議論は行わないが、こういったテーマパーク型の観光施設では、観光文化は純粋に商品として収集され陳列されることになる⁴⁾。

台湾における「日式」温泉は、温泉という天然資源を日本風の設備によって整備することで成立する、ある種のテーマパーク的な存在である。これは、台湾は温泉資源を持ちながらも、伝統的な漢民族文化では、それを活用してこなかったことに起因する。そのため、あらためて観光資源として温泉の活用を考えるようになった現代において、好んで「日式」の疑似体験をさせる場所という方式が選ばれるようになったのである。これはもちろん日本の温泉文化に商品価値が認められたからこそ発生した現象である。また一方に、日本統治時代の文化さえも、台湾文化として捉えなおしていこうという意識も働いている。この意味では、文化を再構築しようという側面も見られる。

日台間の複雑な歴史を鑑み、上述の状況を理解するには、現代の台湾社会における新たな「観光のまなざし」の誕生を想定するしかないであろう⁵⁾。

(3) 日本側の事情として—観光文化としての日本文化の新たな局面

情報の、人の移動のグローバル化がもたらしたひとつの風景として台湾の「日式」温泉を示すこと、これが本稿の最終的な意図である。「日式」温泉の成立には、台湾側の「まなざし」の変化のみならず、日本から流出する情報も重要な要素である。そこで本節では、日本側の観光文化事情に触れておく。

情報のグローバル化は文化の消費化を押し進める。観光文化と同様に、情報・商品として流通し消費される文化としては大衆文化があげられる。アニメやマンガ、ゲームソフトに代表されるような大衆文化としての日本文化の世界的浸透は近年とみに指摘されるようになってきている。最近では、日本の消費文化の価値の高さが注目される傾向にあり、「ジャパニーズ・クール」「J-感覚」などの用語も登場した⁶⁾。ことに、アジアにおいてのその浸透は、アニメやマンガに留まらず、ドラマ、J-ポップ、キャラクターグッズ、ファッションなど多岐に渡っている⁷⁾。

ここで留意したいことは、大衆文化の観光文化である。たとえば、2002年に中国で発行された東京のガイドブックには、「お奨め旅行スポット」として「日本アイドルドラマシーンツアー」やハローキティのテーマパーク、「サンリオビューロランド」などが掲載されている（廖，2002：P32～37）。いわば、新たな日本の観光文化として大衆文化が認められ、それを体現するスポットが都市観光の中に組み込まれるようになってきたことを指摘できる。

一方、伝統文化に関する情報も、流出する大量の情報の中に組み込まれ流布していく。第2章において詳述するが、日本に関する観光情報も市場戦略として積極的に流されたものである。だが、ここにおける日本の伝統文化に関する情報は観光客誘致の意図を超え、移動可能な設備やノウハウの体系に還元されていく。入浴に関連する設備は、日本のフィットネスクラブや温泉施設にごく普通に設置されているフィンランド式サウナのように、移植可能なのである。その結果、思わぬ場所で日本の温泉のコピーが誕生する。台湾の「日式」温泉とは、日本人の温泉文化に対する固有性への思いこみとは無関係に出現した、台湾における日本の観光文化なのである。

2. 台湾における温泉の位置付けの変遷

(1) 北投温泉の歴史から

まず、一つの台湾の温泉の例として、台北市北部に位置する北投温泉を取り上げ、その盛衰の歴史を紹介する。

【資料1 北投温泉史】

北投温泉の温泉地としての歴史は、1894年にドイツ人オウリーがその存在を発見し、

1896年に日本人平田源吾が旅館「天狗庵」を、台北軍政庁財務課長松本亀太郎が旅館「松濤園」開いたことに始まる。1901年には鉄道淡水線が開通しこれに伴い続々と旅館が作られる。そして、1905年、日露戦争時には、日本当局によって「陸軍療養院」が設立され、大量の日本兵がこの地にて傷の養生を行うこととなり、隆盛を極めていく。

北投温泉開発当初に建てられた温泉の多くは日本人向けであると同時に、高官や富商を客とする高価な享楽場であった。そこで、一般の人びとの利用を促すために、「台湾婦人慈善会」が組織した「浴場改良会」による公衆浴場を建てるための運動が始まる。結果、翌1906年には「鐵の湯」が、1907年には露天風呂である「湯瀧浴場」が建設される。この「湯瀧浴場」の周辺は地元民によって整備され北投公園とされ、また1910年には拡大され「北投温泉公共浴場」となった。なお、一般の人びとのための公衆浴場とはいえ、日本統治時代であったため、この「北投温泉公共浴場」も伊豆の公衆浴場を模倣して設計されていた。

1912年には30軒程度であった旅館、料理屋は、台北北門－北投間の列車の開通、後背地の大屯山が国立公園に指定されることなどにより、1937年には温泉旅館70軒余りを抱える大温泉郷へと発展する。この時期、日本人の経営する旅館と、台湾人の経営する旅館は、客層も経営方式も異なっていた。台湾人の経営する旅館は中南部の大商人をその客とし、日本人の経営する旅館は専ら日本人を客としていた。そのため、日本人の経営する旅館では、旅館内の芸人たちによって三味線や能楽など、日本の芸能が演じられ、台湾人の経営する旅館では後に「那卡西（流し）」となる南管楽曲と台湾歌謡が演じられた。

また、1930年代頃には、北投温泉は「溫柔郷」として名を知られるようになる。当初は各旅館が個別に招致していた芸妓や陪酒女が、「芸妓管理所」が設置されることにより、一括で管理され、価格も統一された。日本統治時代には、こうして温泉歓楽街として終夜明かりの絶えない街になっていた。

国民党政府時代に入ると北投温泉は変化し始める。1954年に「女待応生住宿戸聯誼会」が設置され、北投は合法的買春地区となったのである。これによって海外の観光客がどっと押し寄せるようになる。1960年代の日本の観光団体の標準コースは松山空港－士林－仰徳大道－陽明山－北投源泉路－北投温泉であったという。日本国内では、「買春観光」だという抗議もあったが、1970年前後には毎日数十台の大型観光バスが新北投に入った。大型旅館の一日の売り上げ額は数百万円にも達したと言われている。そのため、続々と大規模な旅館が建設されることとなった。これに伴い、北投溪の川幅を狭めて北投溪沿いの通りが拡張された。北投溪には天然記念物である北投石があったのだが、経済優先のこの開発によって、いとも簡単にうち捨てられた。このような開発によって北投は大規模旅館の高層ビルが林立する地域となったのである。

北投の温泉観光に問題を投げかけたのは1967年のタイム誌に掲載された記事である。

この後10年以上議論が交わされ、1979年について北投の公娼制度は廃止される。これによって観光客は激減し、大型旅館は経営危機に陥る。最盛期には旅館数100余りであったのが、廃娼後には徐々に減少し現在では10余りにまで至っている。廃業した旅館の多くはマンションに建て替えられ、安価に売却された。そうして、北投は徐々に住宅地に変化してきた。だが、住宅地に住む市民と温泉との関係は疎遠であった。

1995年、国立北投小学校の小学生と先生から、廃棄されていた北投温泉浴場を保存・史蹟にするとともに温泉博物館を作ろうという陳情があった。この陳情をきっかけに北投温泉は新しい歴史を刻み始める。日本統治時代の建造物は近代台湾の発展を跡づける文化遺産としての価値を見いだされ、地域住民の努力と台北市政府の援助によって観光資源として新たに整備され始める。その努力は、1997年北投浴場の史蹟指定、1998年温泉博物館の開館として結実している。

注1) 上記の北投温泉の歴史については、洪仁徳編『北投采風』2001、台北市政府『北投温泉博物館専刊』2001を参照した。

注2) 1967年12月22日のアメリカタイム誌の記事は以下のようなものであった。「台北から車で30分で北投に着く。北投には75の温泉旅館があるが、中でも出色なのはxx閣である。全てのアメリカ兵が台北の楽しみをxx閣に求めるわけではない。だが、シンシナティ州出身21歳の陸軍兵士Yのようにこの種のことを決してためらわない者もいる」と始められ、北投の二人の女待応生が全裸でアメリカ兵の側に待る写真が添えられていた。(『北投温泉博物館専刊』p.18参照)

以上から、北投温泉の歴史は、日本統治時代、1954年から79年までの風俗地区時代、そして80年から94年までの空白の時代、1995年からの新たな時代、と四つの時期があることが理解できる。

これら四つの時期区分のうち、1980年からの空白の時代、1995年からの新たな時代には、日本との関係は表面に上がってこない。しかし、最初の日本統治時代は言うまでもなく、第二の1954年から79年までの風俗地区時代も日本との関わりは深い。特に、第二期の風俗地区時代は、むしろ生々しいほどである。

この時期の観光のあり方に対し、たとえば瞿海源は1963年から88年までの台湾を訪れる日本人観光客数の増加ぶりを示しながら、「日本人が台湾、フィリピン、タイに来て性観光を行うのは、主として経済的優位さに起因している。また同時に、この種の優勢はきわめて強い侵略性を帯びてもいる。性観光はこのような侵略性を表現する一部分なのである」と指摘している(瞿海源, 1991, p.530)。

瞿のこの指摘に関し、台湾の公娼制度は1979年に廃止されており、1980年代における日本人観光客の増加を直接、性観光と結びつけることには無理がある。むしろ、1985年のプラザ合意以降の日本国内における海外旅行者の急激な増加を考えるべきであろう⁸⁾。だが、1963年から1980年に至るまでの著しい増加は性観光を無視して語ることはできな

い。まさに、観光が経済的優劣関係によって規定され、固定化された地平において展開していたのが、この時期の日本人男性による性観光であったらう。

なお、本稿で注目したいのは1995年以降である。北投温泉が新しい意味を与えられ、再生をはかりはじめるのが、なぜ1995年であったのか、そこに注目していきたい。

表1 日本、アメリカ籍の台湾観光客数の経年変化

年	日本	アメリカ
1963	10,848 (18%)	33,085 (54%)
1965	38,499 (32%)	47,843 (40%)
1970	177,446 (43%)	121,745 (30%)
1975	419,259 (59%)	123,550 (17%)
1980	654,413 (59%)	122,673 (11%)
1985	617,830 (52%)	179,981 (15%)
1988	909,044 (54%)	214,581 (13%)

* ()内は全観光客中に占める割合。

** 出典：瞿海源，1991，p.531

(2) 台湾からの日本観光と観光情報

平成12年度の台湾からの日本への旅行者数は91万人であった。一方、2000年の日本から台湾への旅行者数は92万人であった。統計の時期は多少ずれるが、台湾へ行く日本人旅行者の数と、日本へ来る台湾人旅行者の数はほぼ拮抗している。その前年、平成11年度および1999年には、台湾へ行く日本人旅行者は83万人、日本へ来る台湾人旅行者は93万人と、台湾人旅行者の数が上回っていた。このような日本人旅行者数と台湾人旅行者数の拮抗が起こり始めたのは、少なくとも1997年以降、両者の数が80万人台から90万人台を推移し始めてからであろう。

これらの数値は、台湾・日本間の観光においては、一方的に日本人が台湾を訪れ、台湾人が日本人をもてなす時代が遠くに過ぎ去り、相互に訪れ合う時代に至ったことを示している。

これには、もちろん台湾の経済成長、日本が台湾から比較的行きやすい場所にある国であることも重要であるが、国際観光の行き先として日本を選ぶ、その理由にも注意しなければならない。

そこで、台湾からの観光客が日本に何を期待し、何を楽しんでいるのかに注目する。

平成13年度の観光白書には、台湾を含むアジア地域からの観光客の動向として、「他地域に比較して、テーマパーク等や温泉への人気が高い」ことが指摘されている（国土交通省，2002：p.40～42）。また、平成14年度の観光白書では、台湾からの観光客の動向として、「自然の魅力」「大都会の魅力」「四季・和風」「買い物・食文化」「異国情緒」「レ

表2 日本・台湾間の旅行者数

統計年	台湾から日本	日本から台湾
平成5年	67万人	—————
6年	65万人	—————
7年	58万人	—————
8年	72万人	—————
9年または1997年	82万人	91万人
10年または1998	84万人	83万人
11年または1999	93万人	83万人
12年または2000	91万人	92万人
13年または2001	81万人	97万人

注1) 平成13年観光白書(国土交通省,平成13年7月),平成14年度観光白書(国土交通省,平成14年7月)から作成。

注2) 台湾人旅行者数は法務省資料に基づき,日本人旅行者数は台湾の統計に基づいている。このため,平成5年~8年の日本人旅行者数のデータは得られなかった。

注3) 平成13年の台湾人旅行者81万人のうち,観光客は70万人である。同年の日本を訪れた国籍別旅行者数では韓国(113万人)に次ぎ第2位であるが,観光客数では韓国(65万人)を上回り,第一位である。

トロ」に関心や期待を持ち,「日本人に溶け込んで流行の体験」を願い,「大正ロマンを彷彿させる所へも」訪れ,「これぞ日本だと実感」することを特徴として上げている(国土交通省,2003:p.81)。また,台湾からの観光客は,「中華系諸国・地域における地方への訪日旅行への先駆者」でもあるという(国土交通省,2003:p.81)。これは,2000年9月に日本への団体観光旅行が開始された中国の「昔から有名と言われる日本を代表する魅力を確認」,アジア諸国外であるアメリカの「近代的な側面と東洋の中の独自の日本文化を体験」と比較すると興味深い(国土交通省,2003:p.81)。本当に有名な場所を目で確認しようとする中国人観光客,旅行全体を通して日本文化,日本を漠然と体験しようとするアメリカ人観光客に対し,台湾人観光客はもはや通り一遍の日本文化も,名所旧跡も求めていないのである。「テーマパーク」「温泉」「レトロ」「大正ロマン」「地方への旅行」と,日本の国内観光客顔負けの観光行動をとっていることが理解できる。

このような台湾人観光客の日本における行動は,実際には日本に関する詳細な観光情報によって裏打ちされている。

石井は,台湾における日本の大衆文化の流行について,1980年代からの禁止の網をくぐり抜けての浸透,1993年の日本番組の解禁,1997年頃には「哈日族」(日本の消費文化やメディアを全面的に取り入れる若者を指す)の登場,1999年にはハローキティの大流行といった経過を示している(石井,2001)。観光情報もまたこの流れに乗ったものであり,日本番組の解禁に伴い旅行をテーマにしたバラエティ番組も放映されるようになったことは大きいだろう。たとえば,2003年3月には,ケーブルテレビを通して「ぶ

りり途中下車の旅」「日本の旅」「北海道アワー」などの番組が放映されている⁹⁾。こういったテレビ番組による映像が、東京、大阪などの大都市や富士山、箱根、日光などのとりわけ知名度の高い観光地から「地方都市への旅行」へ目を向けさせるなど、台湾人観光客の日本観光の質の変化に影響を与えたことは想像に難くない。実際、温泉旅館における台湾からの観光客受け入れの先駆とされる能登、和倉温泉の加賀屋が最初の団体客を受け入れたのは1995年である¹⁰⁾。なお、加賀屋は「和倉加賀屋・日本環球影城（ユニバーサルスタジオ・ジャパン）5日」としてツアー名に登場するなど、台湾においては日本の温泉旅館の代名詞的存在になっている¹¹⁾。

ところで、1999年9月、台湾角川書店が『台北ウォーカー』を創刊する。『台北ウォーカー』は「1999年12月の時点では台湾すべての雑誌の中で最も売れた雑誌だったと言われ」るほどの成功をおさめる（石井，2001：p.222）。石井は成功の理由として、「出版法の改正によって外資の出版社が台湾に進出できるようになったという外的な条件の変化」，「角川書店が地域誌である『ウォーカー』について長年にわたってノウハウを蓄積してきたこと」の2点を上げている（石井，2001：p.222）。この1999年は旅行情報誌にとっても大きな転機となっている。日本の旅行情報雑誌『MOOK 自由自在』の中国語版が、台湾と香港において発行され始めたのも1999年である¹²⁾。単なる日本全体のガイドブックではなく『北海道』，『日本東北』，『日本北陸』といったより細かく地域区分された観光情報や、『桜見紀行』，『日本鉄道旅行』，『日本名湯・宿』などのようなテーマ別観光情報が流されるようになる。ただ、『MOOK 自由自在』の各号は日本の観光地のみを取り扱っているわけではなく、世界の主要都市、主要観光地、中国の観光地に関する詳細情報も多く提供している。

また、2002年11月にはやはり日本のJTBによる旅行情報雑誌『るるぶ』の中国語版が発行されている。『るるぶ』の情報は『MOOK 自由自在』よりもさらに細分化されており、第1号は「群馬」である¹³⁾。

今や台湾における日本の観光地情報は、日本の国内観光客が入手するものとほぼ同等の詳細さをもっているのである。

なお、日本から持ち込まれた観光ガイドブックのノウハウは、台湾国内の観光地に関するガイドブックにも影響を与えている。詳細に地域区分されたムック版の旅行情報誌や、温泉、民宿、鉄道旅行等のテーマで編集されたガイドブック等が、次々に発行されている¹⁴⁾。石井は『台北ウォーカー』について、「台湾の若者が求めていた良質な娯楽情報を提供できるノウハウをもった出版社がなかったことが、角川書店が短期間に大きく部数を獲得した理由と言えるだろう。つまり、角川書店の進出も、台湾の文化的需要を満たすための日本の文化資本の輸出であると言えるのである」とまとめている（石井，2001：p.223）。『台北ウォーカー』と同様に地域情報を扱う日本型の観光情報誌や観光ガイドブックは、石井の指摘と同じ理由で台湾に受け入れられていったのであろう。つま

り、1999年以降、観光情報産業そのものが、台湾に輸出されたとも言えよう。

(3) まとめ

90年代の日本から台湾への情報の流れ、90年代後半の台湾から日本への観光客の増加と照らし合わせると、北投温泉における1995年の意味が明らかになる。また、同時に、新たな「日式温泉」が台湾国内において受容される背景も明らかになる。

『北投温泉博物館専刊』には、「地方文化遺産」について「北投地区の開発と発展は主として日本統治時代に集中しており、この時期は台湾近代建築の揺籃期であった。残された文化資産は数多く、台湾の発展を示す重要な証人である」と記述されている（台北市政府文化局、2001:p.55）。一方、先に示したように、平成14年度の観光白書では、台湾から日本への観光客は「異国情緒」「レトロ」にさえ関心を持ち、「大正ロマンを感じさせるところへも」訪れる傾向があると指摘されている。この二点は決して交わらないものではない。北投博物館の記述は、日本統治時代は植民地であったという政治的意味合いが薄められ、ノスタルジックに懐古されるようになった時に初めて可能になるものである。もはや現代の台湾の人びとにとって日本統治時代とは、「異国情緒(日本情緒)」を感じさせる「レトロ」と化しているのである。だからこそ、日本観光においても、同質の「レトロ」に関心を持つのであろう。北投温泉博物館建設運動のきっかけが、小学生によって日本統治時代の建造物に文化遺産的価値を見つけられたことに始まるのも象徴的である。

国民党時代の風俗地区としての時代、その後の空白の時代を経て、90年代にはテレビ等のメディアを通して新たな日本の情報が大量に流入する。新たな情報の中には、古い時代の北投と相通じるような日本の温泉観光地の映像も紛れ込んでいる。こういったことによって、日本統治時代の温泉地としての北投が懐古の対象となり、再評価される地平へまで押し下げられたのである。これは北投に限ったことではない。台湾全体において温泉が観光資源としての価値を再付与される重要な契機であっただろう。

なお、もうひとつの屈辱的な時代であった筈の風俗地区としての時代については、批判の鋒先はむしろ当時の国民党政府へと向けられているため、日本に対する反感が弱められる傾向にあることも指摘しておく。

3. 現代台湾における「日式温泉」

(1) ガイドブックの記述から

表3は、いつ頃から「日式」の記述が出現し、それがどのような施設を伴うものであるかを見るために、ガイドブックから北投温泉の温泉施設、温泉旅館に関する記述を抜き出したものである。

表3 ガイドブックに見る温泉施設および温泉宿泊施設の紹介

No.	設立年	紹介文抜粋
1	日治時期	北投において最も歴史の古い公共浴場である。…。背の低い日本式の平屋は静かに北投溪端に立ち続け、100年来一貫した素朴な風貌を維持している。…。草創初期、平民の浴場として経営され、一回の入浴料はたった3銭であった。このため、「三仙間」との俗称があった。内部には男女大浴場が設けられている。
2	日治時期	北投で最も歴史の古い温泉旅館である。当初は高名人士が出入りする高級旅館であった。…。旅館は今日もなお日本式の趣ある庭園と古朴な外観とを留めている。また、快適な宿泊施設と温泉を備えている。宿泊客は、部屋付きの浴室以外に、大浴場を利用できる。大浴場は、暖かみがあり肌理の細かい観音石で、半楕円型に、窓に面して作られている。底が見える澄んだ湯の中に座り、緑豊かな庭園に面する長窓を開けると、松風がそよそよと吹きつけ、なんとも心地よい。
3	1934年	日本統治時代に営業を開始し今に至るこじんまりとした温泉旅館である。建物は歳月に洗われ古風な趣がある。日本式庭園は、小橋、流水、石段、花壇などが巧みに配置されている。客室には等しく温泉浴室が設けられており、茶室、日本式宴会場もある。この他、旅館内には宿泊客用の男湯、女湯がある。湯に浸り、酒をすすり茶を飲む、昔日の温泉郷の情趣が濃く漂っている。
4	1985年	浴室環境は清潔である。個人用浴室、休憩室付き浴室以外に、夫婦や恋人同士のために空間を比較的広く設計した二人用浴室が設置されている。
5	1994年	バスターミナルに隣接しており、交通は便利である。客室内には温泉浴室の他にジェットバス、簡易サウナ等の設備がある。
6	1994年	モーテル方式の経営である。客室内を除くと全天候で温泉を提供している。また簡単な個人浴室も設置されている。
7	1995年	健康志向を標榜し、多くの農産品があるばかりでなく、景色を楽しみ、食事と温泉浴ができる。数間の独立した温泉浴室、冷・熱2カ所の露天大浴場がある。温泉浴に飽きたなら、山泉を引いたプールで泳ぐのもいいだろう。快適な温泉浴の後は、ヨーロッパ式の屋外カフェテラスで休憩できる。
8	1997年	こじんまりとした温泉旅館である。客室にはすべて温泉浴室が備え付けられている。その他に、数カ所の家族風呂がある。入浴、宿泊ともに安価である。
9	1998年	休憩と入浴を主とし、客間にはすべて温泉浴室が備え付けられている。価格は安価である。
10	1998年	優雅なレジャーホテルである。……。各式の客室(山水、風情、尊爵、日式)は見事な宿泊設備と温泉浴室が完備しており、宿泊客に静かで心地よい浴湯空間を提供している。……。会員用のクラブには、男女露天温泉、屋内大浴場、サウナ、指圧按摩、フィットネスルーム、屋外プールなどの施設がそろっている。露天温泉は、椿の生け垣で周囲から遮断し、池の畔には山石をあしらった温泉庭園の風情を整えるなど、精緻な作りとなっている。……。館内にはスパが併設されており、専属の美容部員が待つ専用美容区がある。独特の雰囲気のある空間で、天然温泉、緑豆五穀のエッセンスなど天然素材による美肌精油を用いる。

11	1998年	レジャー村の売り物は活魚、山菜、茶、温泉である。施設には多くの個人用浴室、および休憩室付き浴室がある。この他に温泉プール、親子遊楽区、茶芸館があり、家族で遊ぶのに適している。
12	1999年	一步ロビーへ入ると、このホテルの明るく清潔な雰囲気は人を爽快な気分にする。経営者の理念、温泉入浴と養生の結合が表出しているのである。大浴場のみ設置されている。男女別の浴場はの壁には柔らかな色調のタイルが貼られており、比較的大きい。冷水衝撃区、卵石脚按摩区などが設置されており、冷熱交互に入浴したり、肩脚に按摩ができる。
13	2000年	200室近くの客室を抱える大規模な温泉旅館である。客室に付設の温泉浴室の外、男女大浴場、家族風呂がある。大浴場は不規則な形状の卵石で作られており、そこにもたれるとマッサージを受けているかのように気持ちよい。風呂の縁に積み重ねられた岩や天井の鍾乳石が、神秘の洞窟に迷い込んだような気分にする。よい景色がのぞめる客室には檜の浴槽の温泉が設置されている。
14	2000年	団体客向けの旅館である。温泉浴室を付設した各種客室以外に、男湯と女湯が設置されている。広い浴場には超音波マッサージ風呂、打たせ湯、サウナ等の水療施設がある。……。この他、旅館では「那卡西（流し）」の演奏があり、訪問客に北投特有の風情を十分堪能させてくれる。
15	2000年	一種の総合温泉。水療、美容、美食など多目的型のレクリエーションクラブである。館内には様々な入浴設備があり、十分に温泉療養を楽しめる。また、レストランでは洗練された香港式海鮮料理が味わえる。……。露天温泉区は屋上にあり、周囲を緑で囲み、奇岩を配している。この区にも、打たせ湯、ジェットバス、白硫磺温泉があり、さらに日本式ラドン温泉製造器を導入しているため、泉水は微量のラドンを含み、皮膚の呼吸を促進し養生効果を高める。
16	2000年	温泉入浴、休憩宿泊、養生スパなどが結合したレジャー施設である。静かな雰囲気の中、心身を完全にリラックスさせられる。入浴部分では、男女大浴場、豪華湯屋がある。また、各客室にも温泉が設置されている。大浴場ではジェットバス、打たせ湯、乾式、蒸気サウナなどが楽しめる。豪華湯屋は秘密のプライベート空間を提供している。露天花園温泉付き客室は屋外に庭園が作られており、雄大な自然美と温泉の情趣をともに楽しめる。
17	2001年	美食と温泉が合一した温泉レストランを標榜する。…。日式の温泉空間は静謐を提供する。
18	2002年	まさにホテル級の設備と温泉が結合した旅館である。新しい和風と南洋風の雰囲気的设计が現代的感覚と融合している。北投の多くの温泉の中、独特の存在感を示している。館内には、恬静、養生、頂級の三種の芳香温泉浴室があり、大理石造りの浴室は穏やかで高雅な雰囲気である。客室にはそれぞれ異なったアロマオイルが置かれ、心身共にリラックスできる。……。会員専用施設には、三面に視野が開けた屋内禅風浴場、自然の趣が感じられる日式露天温泉浴場、身体に心地よい水療館がある。また、檜および大理石の温泉浴室付き客室がある。中でも、桃花総統室には庭園付の大型温泉露天風呂が設置されており、湯に浸りながら大屯山の景観を楽しむことができる。
19	2002年	北投温泉地域で最も豪華な温泉施設の一つである。日式温泉の風情を追い求め、300坪の庭園の中には、流水や竹、古木を配し禅風にしつらえられている。

出典：2002年、『渡假温泉 泡透透』、戸外生活図書股 有限公司

表3の作成にあたり使用したガイドブック『渡假温泉 泡透透』の北投温泉の項には、29の温泉施設および温泉旅館が紹介されていた。このうち、「北投温泉親水公園」「滝之湯」「北投温泉公共浴室」の三つは、日本統治時代に設置された公共浴場である。これらのうち、「北投温泉親水公園」は1999年に、「北投温泉公共浴室」は2000年にリニューアルされている。また、民間の旅館、温泉施設についても、日本統治時代および光復直後に建設された施設を改修して営業しているものも多い。表3の作成にあたり、建設時期ごとの施設の変化を明らかにするために、日本統治時代および光復直後の施設を改修して使用しているものは外した。その結果、十九の温泉施設および温泉旅館に関する記述が得られた。

以下に、表3を通して得られた温泉施設および温泉旅館の形式の変遷を辿っていく。

まず、No.2, No.3は、日本統治時代に建てられ、現在も営業している旅館である。この二つの旅館が日本式の庭園と浴場を設置していることは、日本人を客とし日本人によって経営がなされてきた歴史を考慮すると、ごく当然である。しかしながら、No.2にもNo.3にも露天風呂の記述はない。これは、当時露天風呂が風俗上良くないものと認識されていたことを反映したものである¹⁵⁾。

次に、No.2, No.3を除くと、表3上において最も古いものは1985年に営業を開始したNo.4である。No.4の施設はいわゆる日本の旅館における大浴場が設置されていない。個人用、二人用等、浴室の広さは考慮されているが、浴室はあくまでプライベート空間として位置づけられている。

なお、No.4の設立時期は、前章で示した通り、北投温泉における温泉観光の空白期であり、新たな日本の温泉事情が情報として伝えられる以前である。

表3上においては、1994年以降、次々に温泉施設、温泉旅館が建設され始めている。前章で現代の北投温泉の歩みが1995年に始まることを示した。だが、ここにおいては、1994年から、すでに温泉の観光資源としての見直しが始まっていたと想像できる。といっても、1994年に建設されたNo.5およびNo.6は、駅前に立地するごく簡単な温泉施設を設置した旅館である。それでも屋内の大浴場が設置され始めた点は注目に値するだろう。

1995年に建設されたNo.7から、温泉施設の位置づけが大きく変化し始める。まずは露天大浴場の登場がある。さらにはプール、カフェテラスなどの設備が併設され、総合的なレクリエーション施設であることが意識されている点である。この傾向は1998年以降、一層顕著になっていく。フィットネスルームやクアハウスを意識した水療施設、アロマテラピーなど、それぞれが工夫を凝らした総合温泉レクリエーション施設として設計されていく。

また、「日式」の名称と、明らかに日本の温泉を意識した庭園付きの露天風呂は、1998年のNo.10から登場する。2002年のNo.18では檜の浴槽、禅風の浴室など、日本的要

素がさらに拡大する。そして、同じく2002年のNo.19は、「日式温泉の風情を追い求めた」温泉施設である。

(2) 「日式」の意味するもの

前節で示したように、1995年のNo.7から露天大浴場が登場する。露天大浴場は現代の台湾の温泉風景を特徴づける一つの要素となっている。露天大浴場は基本的に水着着用であり、日本の露天温泉の風景とは異なった印象を与えるものである。



写真 No.1 北投温泉親水公園入り口

右手の額には、まるでプールのように水着姿で楽しむ客の
写真が並べられている (2003.3.6 撮影)

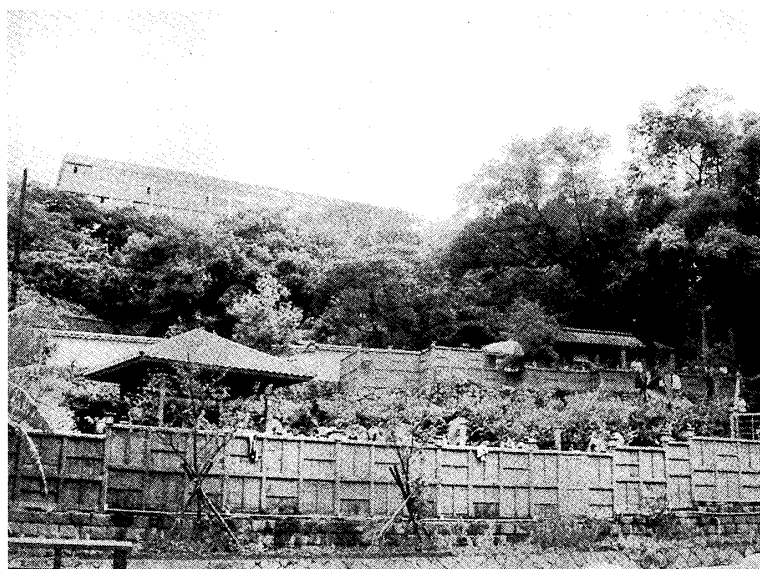


写真 No.2 北投温泉親水公園裏側から

日本庭園風の敷地内に五つの露天風呂が設けられている
(2003.3.6 撮影)

また、「日式」の名称や、露天温泉の庭園の風情、その他の日本的要素が強調されるのは1998年以降に建設された温泉施設においてである。これらの日本的要素は「豪華」「静けさ」「リラックス」などの言葉と併用されている。

以上から、まず、1990年代の半ば以降、観光資源として温泉が見直される中で、単に狭い室内空間で入浴を行うのではなく、開放的な屋外空間でレジャーとして温泉浴を楽しむという考え方が立ち現れてきたことが理解できる。その際に、日本式の露天風呂がひとつのモデルとして利用されたと言えるであろう。また、その後の「日式」の要素の氾濫は、日本の温泉観光情報の増大に伴い、次々にコピーされていったものである。これは、一旦レジャー温泉のモデルとして日本式の露天風呂が確立すると、さらに本格的なものという流れに乗ったものであろう。

以上のように、温泉そのものとしての「日式」は、大露天風呂や、その他様々な施設を備えたレジャー性を重視した温泉と結びつけられている。だが、温泉観光地としての全体に目を向けると、日本イメージは日本統治時代というレトロイメージとして捉えられていることがわかる。この例として、たとえば、No.14において行われる「那卡西（流し）」の演奏や、観光地全体の景観整備があげられる。この点は、日本統治時代の文化さえ台湾文化の一つの層とみなし、文化を再構築していく動きと捉えることができる。

なお、日本を模した景観整備は他の温泉地でも行われており、日本的であることが台湾における新たな温泉地イメージとして定着しつつあることもうかがわれる。



写真 No.3 台中県谷関温泉の遊歩道整備 (2003.3.7 撮影)

4. 結論

台湾において日本の温泉が受容される過程において、歴史的経緯および日本との交流の密度を無視することはできない。だが、日本の温泉文化は台湾だからこそ受け入れられたわけではない。

その理由として、レジャーとして温泉浴を捉え、観光資源としていく場合、日本の温泉文化は極めてモデルとしやすいことを指摘しておく。

ある意味で日本文化の紹介者として有名なベネディクトは日本人の入浴の習慣について以下のように記述している¹⁶⁾。

「日本人の最も好むささやかな肉体的快樂の一つは温浴である。どんなに貧乏な百姓でも、またどんなに賤しいしもべでも、富裕な貴族と全く変わりなく、毎日夕方に、非常に熱く沸かした湯につかることを日課の一つにしている。最もありふれた浴槽は木製の桶で、その下に炭火をもして湯を華氏一一〇度またはそれ以上に保つ。人びとは湯ぶねに入る前に身体中をすっかり洗い清める。それから湯につかって温かさとかつろぎの楽しみに身をゆだねる。彼らは湯ぶねの中に胎児のような姿勢で両膝を立てて座り、顎まで湯につかる。彼らが毎日入浴するのは、アメリカと同じように清潔のためでもあるが、なおほかに、世界の国ぐにの入浴の習慣には類例を見いだすこの困難な、一種の受動的な耽溺の芸術としての価値を置いている。この価値は、彼らの言によれば、年をとるにしたがってしだいに増大していく」（ベネディクト、1966：p.207）

要するにベネディクトによれば、日本人は清潔を保つための合理性として入浴を捉えるのではなく、「温かさとかつろぎの楽しみ」「一種の受動的な耽溺の芸術」としての価値を見いだしているという。日本の温泉文化はこういった日本人の入浴観に根ざしており、湯に浸ることそのものを楽しむものである。つまり、日本の温泉文化は非活動的ではあるが、レジャー的要素を始めからもっているのである。こういった日本の入浴文化の特色は、明確に医療・保養を目的とし、厳格に入浴方法を管理していくヨーロッパのクアハウスのあり方とは大きく異なっている。

温泉が日本観光においてアジアからの観光客（台湾の他、韓国、香港、中国）にとっても人気のある行き先となっていることは第2章においても指摘した（国土交通省、2002：p.40～42）。この点で、日本イメージをレトロと捉えるのは台湾に固有の現象であるが、「温かさとかつろぎの楽しみ」に価値を見いだすならば、温泉施設の開発において日本式を取り入れていく可能性は他の国にも残されているだろう。

グローバリゼーションが推進するものは、人の移動、モノの移動ばかりではない。伝統文化さえ、商品として消費に値する価値を見い出されさえすれば、切り取られ、他国の風景の中へ埋め込まれていく。こうして、一見しただけではどこの国へ来たのかわからないような風景が作られていく。台湾の温泉地における「日式」の看板の氾濫は、日

本との歴史的関係の上に、現在のグローバル化が重なり合い現れた現象なのである。

注

- 1) 「ホスト&ゲスト」はバーレーン・L.スミスの1977年に出版された『ホスト&ゲスト－観光活動の人類学的考察』から始まった言葉である。
- 2) 資本主義的な世界システムの中で国際観光を捉えた場合、ホスト－ゲスト間に、どうしてもオリエンタリズム的な関係やまなざしが登場する。だが、スミス自身はあまり自覚的ではない。たとえば、「ホスト&ゲスト」第二版の序論において、『少数民族観光』は、エスキモーやパナマのサンブラス・インディアン、インドネシアのトラジャについての事例研究が示すように、土着の人びと、または時として異国情緒をもつ人びとの習慣が「風変わり面白い」ということを理由に、世間に売り込まれているような観光の形態である。観光活動を刺激する目的地での行動には、地元民の家や村への訪問や、舞踊、儀式の見物、素朴な工芸品や骨董品の買い物などが含まれ、それらのなかには美術家にとって重要かつ固有の価値を有するものもある。往々にして、こうした観光客は、「踏み固められた道」を敬遠して、好奇心に駆られたり旅行通の仲間に勧められたりして、ごく限られた数の人間だけを魅するものを求めていく傾向がある。こうして観光客の流れが分散し小単位になるにつれて、ホスト対ゲスト間に起こるインパクトは小さくなる」(スミス, 1989 : p.6)と記しており、少数民族観光そのものに付随するゲスト側の「まなざし」の問題には触れず、現地での両者間の良好な関係の構築を念頭に置くに留まっている。だが、山下編の『観光人類学』に収録された論文では、まだ用語としては使われていないが、観光情報として生産されるイメージに含まれるオリエンタリズム性が指摘されるようになってきている(落合, 1996 : p.56~65)(山中, 1996 : p.74~83)(豊田, 1996 : p.131~139)。本稿において、注釈なしに「ホスト－ゲスト関係」という言葉を用いる場合には、その関係の前提となるオリエンタリズム的な構造をも示すこととする。
- 3) たとえば、山下によるバリの芸能の事例、煎本によるアイヌのまりも祭りの事例などがあげられる(山下, 1999), (煎本, 2001)。また、橋本のフィジーの事例では、伝統芸能の観光文化としての商品化が十分でないために、観光客に十分な満足を与えていないことが指摘されている(橋本, 1999 : p.227)。
- 4) 観光体験は偽物か本物かという議論は、1964年のダニエル・ブーアスティンの「疑似イベント」論と、1976年にそれに対する批判として提示されたディーン・マッカネルの「オーセンティシティ(本物性)」論から始まる(吉見, 1996 : p.25)。作り物であるテーマパークがなぜ受け入れられるのかについては、鉄道の発達によって

もたらされたパノラマ的視角という旅行者の身体感や現実感の変化が博覧会やデパートを海外旅行と同様の空間的経験としたという吉見の議論、およびテーマパークは現実よりもリアルなハイパーリアルを追求するものであるというジョン・アーリの議論などがあげられる（吉見，1996：p.30～31）（アーリ，1995：p.261）。

- 5) 「観光のまなざし」はアーリの著作タイトルである（アーリ，1995）。
- 6) 「ジャパニーズ・クール」については2003年5月5日の日経新聞記事「ニッポンの文化力」に取り上げられている。「J感覚」は2003年7月21日，22日の日経新聞記事「アジアで伸びるJ感覚」による。どちらの記事も消費文化において「日本的かつこよさ」が認められてきたことを指摘している。
- 7) 日本の大衆文化の東アジア各地への浸透に関するまとまった論考としては、石井の『東アジアの日本大衆文化』（石井，2001）があげられる。また、台湾に関するものとして、岩淵の「グローバル化の中の東アジアメディア交通－台湾の「日本偶像劇」受容から」等があげられる（岩淵，2001）。アジアにおいて日本の大衆文化が受け入れられる理由として文化的近似性，文化的近時性などが指摘されている。
- 8) 1986年3月の外務省統計では、日本からの海外渡航者は683万人，前年比24%であった（下川，2001，p.519）。
- 9) 『なーるほど・ザ・台湾』2003年3月号参照。
- 10) 朝日新聞2001年12月30日「しごと新世紀」参照。
- 11) 『MOOK 自由自在雑誌書 No.57北陸』表表紙裏の広告参照。
- 12) 『MOOK 自由自在 No.17北海道』の初版は1999年12月の発行である。No.1東京はこれと前後し，2000年2月の発行である。なお、『MOOK 自由自在』は現在 No.106 漢城・江源道まで発行されている。<http://www.japantvl.com/books/mook> 調べ。
- 13) 『群馬 '03るるぶ』国際中文版参照。
- 14) たとえば，今回入手した台湾の温泉関連のガイドブックの初版発行日は次の通りであった。『秘湯』趨勢文化事業出版社，2002.9。『泡湯楽』東林華榮傳播事業股份有限公司，2002.11。『湯屋』上旗文化事業股份有限公司，2002.12。『浪漫温泉』太雅出版有限公司，2003.1。『渡假温泉 泡透透』戶外生活図書股份有限公司，2001年1月。
- 15) 公共浴場の誕生について，「北投の住民，台北市民の利用も比較的少ないがなかったわけではない。北投の住民は天然に湧出する温泉を利用し，温泉浴を行い，露天風呂の風情を味わっていた。このため，北投溪や各地の温泉湧出口には，徐々に臨時の温泉浴場が作られていった。1905年11月，台湾婦人慈善会顧問長谷川謹介らは浴場改良会を設立し，北投十八分庄礦嘴口湧出口の温泉を引き，衛生的で清潔な公共浴場を建設し，一般民衆用に開放するよう提言した」（洪徳仁，2001，P34）と記述されている。この公共浴場は1908年に建設が始まり，翌年に完成する。また，

北投温泉博物館には1911年に撮影された北投溪の露天温泉浴場の写真が残されている。その説明には、露天温泉は「当時、風俗を乱すとの理由で取締にあった」と記されている。なお、この頃には天皇を北投温泉へ迎える計画が持ち上がっており、それは1913年の滝之湯、および北投温泉公共浴場の改築から着手される。以上から、公共浴場の建設は、婦人の利用を考慮して行われたものであることが理解できる。それと同時に、天皇の御幸を念頭におき、平民の露天温泉風俗が取り締まられていったことも想像できる。

- 16) ベネディクトの『菊と刀』は台湾においても翻訳されている。2003年3月の調査時点で、台北市内の書店において平積み状態で販売されていた。

参考文献

- アーリ. J, 1995, 『観光のまなざし－現代社会におけるレジャーと旅行－』加太宏邦訳, 法政大学出版局
- ベネディクト. R, 1966, 『菊と刀 日本文化の型』, 長谷川松浩訳, 世界思想社
- 橋本和也, 1999, 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』, 世界思想社
- 洪徳仁編, 2001, 『北投采風』, 北投市八頭里仁協会
- 石井健一, 2001 「文化と情報の国際流通」, 石井健一編, 『東アジアの日本大衆文化』, 蒼蒼社
- 石井健一, 渡辺聡, 2001, 「国境を越える日本のテレビ番組－台湾の事例」, 石井健一編, 『東アジアの大衆文化』, 蒼蒼社
- 煎本孝, 2001, 「まりも祭りの創造－アイヌの帰属性と民族的共生－」, 『民族学研究』6 6－3, 日本民族学会
- 岩渕功一, 2001 「グローバル化の中の東アジアメディア交通－台湾の「日本偶像劇受容」から」, 栗原彬他編 『越境する知5 文化の市場：交通する』, 東京大学出版会
- 瞿海源, 1991 「色情与娼妓問題」『台湾社会問題』楊国 他編, 巨流図書公司
- 韓 琳, 2002, 『群馬 '03るるぶ 国際中文版』, 日僑文化事業股份有限公司
- 国土交通省編, 2002, 平成13年度『観光白書』, 財務省印刷局
- 国土交通省編, 2003, 平成14年度『観光白書』, 財務省印刷局
- 劉玉貞, 2002, 『渡假温泉 泡透透』, 戸外生活図書股 有限公司
- 廖詩文, 2002, 『世界名城之旅 東京』, 中国旅遊出版社
- 「なーるほど・ザ・台湾」編集委員会, 2003, 「なーるほど・ザ・台湾」Vol.192 三月号, 日僑文化事業股份有限公司
- 落合一泰, 1996, 「《南》を求めて－情報資本主義と観光イメージ」, 山下晋司編 『観光人類学』
- 下川耿史, 家庭総合研究会編, 2001 『昭和・平成 家庭史年表』, 河出書房出版社
2003. [27] 社会学部論叢 第14巻第1号

- スミス. V. L, 1992 「序論」 スミス, バレーン. L 編, 三村浩訳 『観光・リゾート開発の人類学－ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』, 勁草書房
- 台北市政府文化局, 2001, 『北投温泉博物館専刊』
- 豊田三佳, 1996, 「観光と性－北タイ山地の女性イメージ」, 山下晋司編 『観光人類学』
- 山下晋司, 1999, 『バリ 観光人類学のレッスン』, 東京大学出版会
- 山中速人, 1996, 「メディアと観光－ハワイ「楽園」イメージの形成とメディア」, 山下晋司編, 『観光人類学』
- 優可欣編, 2001, 『MOOK 自遊自在 No.57日本北陸』, 墨刻出版
- 吉見俊哉, 1996 「観光の誕生－疑似イベント論を超えて」 山下晋司編 『観光人類学』, 新曜社